

1. 近年の水揚量の推移と資源状況

太平洋側のマサバ資源は、平成15年から実施された資源回復計画に基づく操業管理および数年おきに発生する資源量の多い年級群（卓越年級群）の加入により維持され、まき網漁業による水揚量も増加する傾向にあります（図1）。近年では、平成25年に99億尾の卓越年級群が発生し、この年級群が漁獲されるようになってからは、20万トンを超える水揚量が継続しています。しかし、この平成25年級群は現在4歳魚となっていますが、4歳魚としては小型（体重300～400g：平成24年以前は500g前後）で、平成26年以降の年級群にも成長に遅れがみられています。

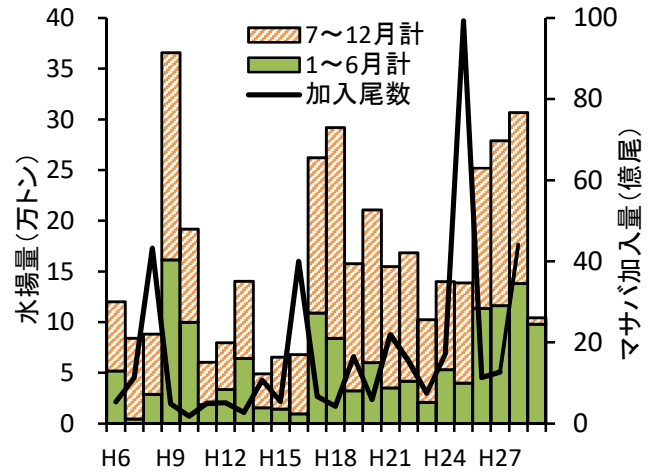


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ加入量

2. 7～9月の漁況

北部太平洋まき網による7～9月のサバ類水揚量（9月25日までの速報集計値，銚子～八戸主要港水揚げ）は、3.9千トンと前年（5.9千トン）を下回って推移しています。海域ごとの漁況の概要は以下のとおりです。

- 銚子沖～常磐南部：常磐南部沖を主体に漁場が形成されましたが、前年を下回り低調でした。
- 金華山沖～三陸南部：わずかに漁場が形成されましたが、前年同様に低調でした。
- 三陸北部～八戸沖：漁場が形成されているものの漁獲量はまとまらず、前年を下回って推移しています。
- 道東沖：9月20日からまき網による操業が始まり、漁獲量は1,000～1,500トン/日となっています。

3. 9～12月の漁況予測

まき網漁業による1～6月の水揚量と9～12月の水揚量との間には正の関係があり、今年の1～6月の水揚量（9.8万トン）から予測すると12.5万トンとなり、前年の9月～12月の水揚量（16.5万トン）を下回る結果となります（図2）。しかし、今年の1～6月は来遊量が少なかった訳ではなく、主群の4歳魚が産卵群であるため、伊豆諸島以西の産卵場に回遊してしまい水揚量が伸びなかったことが考えられます。伊豆諸島よりも西の海域では、まき網や定置網での水揚量が前年を上回った海域が多く、しかも産卵量が前年の3.6倍になったことから来遊量が多かったことが推測されます。今後もこの4歳魚が漁獲の主体になると考えられることから、今年の9～12月の水揚量は、前年に近い14～15万トンになると予測されます。

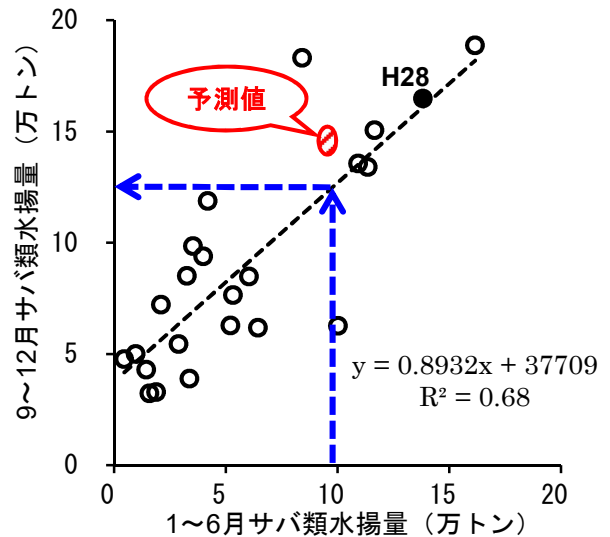


図2 北部まき網によるサバ類1～6月水揚量と10～12月水揚量との関係

漁獲サイズについては、これまで漁獲の主体となっているマサバ4歳魚（体重300～400g）が引き続き主体となり、3歳魚（体重300g前後）と5歳以上（体重500g以上）が混じると考えられます。

また、今年の親潮第1分枝は平年よりも南偏傾向と予測されていることから、魚群の南下回遊は前年のように遅くならず、10月中には三陸沖に漁場が形成されると考えられます。（回遊性資源部）

★秋漁予測のまとめ

- ・今期の秋漁は、前年並の14～15万トンの漁獲となる。
- ・漁獲サイズは、体重300～400gを主体に、300g前後と500g以上が混じる。
- ・10月中には三陸沖で漁場が形成される。